

〔論 文〕

# 観光資源論から見た資源の「利用」の考え方

——日本遺産を活用した兵庫県淡路島の取り組みを事例に——

森 重 昌 之

## I 緒 言

観光現象の基本的な構造は、観光客による「観光行動」、観光地や目的物を指す「観光対象」、両者をつなぐ交通や情報といった「媒介機能」によって説明される。このうち、観光対象は観光客の欲求を喚起したり、充足させたりする目的物であり(岡本・越塚 1978:42)、「観光資源」と「観光施設」によって構成される(図1)。そして、観光資源とは「観光に利用するために、人びとの働きかけの対象になり得る地域の要素」(森重 2012:114)をいい、あくまで観光対象の素材に過ぎないと考えられている<sup>1)</sup>。

観光資源論では、これまで観光資源の定義や分類、評価など、さまざまな研究が行われてきた(足羽 2007; 溝尾 2008; 尾家 2009; 寺前 2017; 上田 2017など)。しかし、観光現象を説明する上で重要な要素であり、多くの研究の蓄積があるにもかかわらず、観光資源は現在までのところ、さまざまな解釈がなされ、見解が統一されていない状況にあり、定義が漠とした状態のまま用いられている(高橋 2014:109)。その中で、森重(2012:118)は、観光資源の分類に言及した先行研究を整理した上で、従来の議論では観光資源の価値を高め、その効果的な

「利用」を図る意義が強調されてきたと指摘している。そして、観光資源が「人びとの力によって創造できるかどうか」によって自然観光資源と人文観光資源が大別されているとした上で、観光資源の利用よりもむしろ、「保全」の観点から分類の意義を主張した(森重 2012:120)。

それでは、観光資源論において資源の効果的な利用はどのように考えればよいのであろうか。本研究では、働きかけの対象である資源そのものではなく、観光資源化を図るプロセスに着目することで、観光資源論から見た観光資源の効果的な利用の考え方を整理したい。その上で、兵庫県淡路島の日本遺産を活用した取り組みを事例に取り上げ、観光資源の効果的な利用に向けた現状と課題を整理することを目的とする。

淡路島は歴史・文化や食材、自然、温泉などの観光資源が豊富で、高く評価されているにもかかわらず、統一した観光戦略やブランド戦略の欠如が課題として指摘されている(淡路島総合観光戦略策定会議 2018:19)。その中で、2016年4月に『『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」～古代国家を支えた海人の営み～』をタイトルとするストーリーが日本遺産として認定された。その後、日本遺産を活用したさまざまな取り組みを始めていることから、本研究の事例として取り上げた。調査にあたっては、2019年3月および2020年1月に兵庫県淡路県民局、一般社団法人淡路島観光協会、伊弉諾神宮への聞き取り調査および資料収集を行った。また、2020年2月に五斗長垣内遺跡や慶野銅鐸、松帆銅鐸、自凝島神社、由良・成ヶ島など、日本遺産の構成文化財の資源調査を実施した。

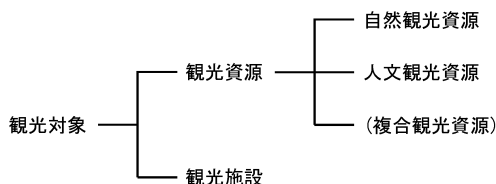


図1 観光対象と観光資源、観光施設

## II 観光資源論における資源の効果的な利用の考え方

観光資源は「本来観光現象とは無関係に存在しながら、観光対象として機能する部分」である(岡本・越塚 1978: 42)。「資源は“ある”ものではなく、“なる”ものである」(Payne 2003: 506)とされているように、観光資源には変換のプロセスが存在する。古くは、井上(1936a: 11)が①新たな観光資源を発見して開拓したり、魅力として再認識したりする「観光資源の発見」、②人為的に新しい観光資源をつくる「観光資源の工作」、③保護や美化、完成、助長といった「観光資源の開発」、④多くの社会、大衆に周知させる「観光資源の宣伝」として、観光資源化プロセスを説明している。また、森重(2012: 114)も、①人びとが地域の要素に何らかの働きかけを行う意向を持つ「対象化」、②実際の人びとの働きかけによって地域の要素を資源に変換する「(狭義の)資源化」、③資源を生産・流通・交換できる財・サービスに変換する「商品化」の一連のプロセス全体を「(広義の)資源化」と呼んでいる。

観光資源について考える際、これまで働きかけの対象となる目的物、つまり資源そのものの特性や分類に重点が置かれてきた。しかし、観光資源は基本的に働きかける側と働きかけの対象の関係性によって理解される。そのため、いずれか一方だけに着目しても、その本質を捉え

ることはできない。観光資源論において重要なことは、前述した「本来観光現象とは無関係に存在する」点と「働きかけによって観光資源に変換される」点にある。すなわち、もともと地域にある事物や要素(自然資源や人文資源)に、人びとが観光利用の可能性を見出し、働きかけることによって、有用物や財、価値といった観光対象になる(図2)。

この時、働きかけの対象となる観光資源だけではなく、観光利用のために働きかける側の「人びと」にも着目する必要がある。働きかける側の人びとにはさまざまな知識や技術、価値観が備わっている。Payne(2003: 506)は、観光客に魅了される資源は高く評価されるが、経済的価値が認められない資源は無視または排除されるとし、働きかける側が評価を決めていることを指摘している<sup>2)</sup>。井上(1967: 84-85)も、日本アルプスの山々が一般の関心を集めるようになったのは明治半ば以降、また新緑が注目されるようになったのは江戸時代以降などと例示しながら、民族や時代によっても観光対象が異なると述べている。このように、働きかける側の人びとの価値観によって観光資源化されるかどうかが決まるので、同じ事物や要素であっても、国や地域、時代が異なれば、観光資源化されないこともある。佐藤(2008: 20-21)も同様に、「働きかけ」のメカニズムとして、①社会の決まりやしきみといった「制度」、②制度の中で明文化されていない、暗黙の慣習やルールと

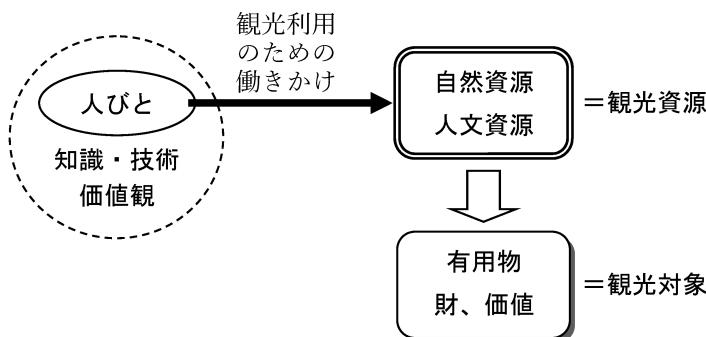


図2 働きかけによる観光資源化プロセス

いった「文化」、③人びとが資源に働きかける際の手段である「技術」をあげ、これらの状態が変化することによって、資源化が促進されたり、阻害されたりすると述べている。

このことは、実際の観光資源化の様子を見るとよく理解できる。例えば、北海道知床連山にある遠音別岳<sup>おんねべつ</sup>では、毎年5月下旬頃に残雪が振り返ったキツネのように見える「見返りキツネ」が現れる(写真1)。これは自然資源が観光資源化されている例であるが、地域の人びとにとって春の到来を告げるという人文資源としての要素が加わり、観光対象として成り立っている。また、鳥取県三朝町<sup>みささ</sup>にある三佛寺投入堂は切り立った断崖の岩窟に建ち、「日本一近づくことが困難な国宝」として知られている(写真2)。しかし、こうした立地の特性だけでなく、修験道の開祖とされる役行者<sup>えんのぎょうじや</sup>が法力でお堂を投げ入れたという言い伝えが加わることで<sup>3)</sup>、観光利用の魅力を高めている。さらに、大阪市高速電気軌道(Osaka Metro)御堂筋線の梅田駅や淀屋橋駅、心斎橋駅は、高いアーチ状の天井によって広大な空間が形成され、プラットフォームで写真を撮る人も少なくない(写真3)。こうした景観としての美しさもさることながら、昭和初期に世界に恥じない立派な地下鉄をつくらうとした大阪市の強い意気込み(中川 2019: 112)や平成20年度選奨土木遺産に選定されたことも伝えられれば、日常的に利用している人びとにとっては何気ない光景も、観光資源としての価値を高めることにつながる。

そもそも、資源は多様な利害が刷り込まれたものである(佐藤 2008: 7)。河村(2005: 132-133)は、観光資源の特殊性を発揮させるには、観光資源の周囲に文化的特徴を反映さえ、その魅力を増加させることと述べている。このように、自然観光資源か人文観光資源にかかわらず、人びとが観光利用のために働きかける際に、そのディテールや背景にある言い伝え、当時の思いに着目するなど、働きかける側の人びとの価値観が加わることによって観光資源化されている。井上(1936b: 9)も「天地百般のも



写真1 遠音別岳に現れる見返りキツネ



写真2 断崖の岩窟に建つ三佛寺投入堂



写真3 高いアーチ状天井の御堂筋線淀屋橋駅

のが、少しく意を潜めて考察すれば概ね何等かの意味に於て観光資源たり得るものといつてもよい位である」と述べ、このことは古くから指摘されていることがわかる。なお、大橋(2010: 22)は「観光資源についての何らかの(多くは

経済上の力を発揮できるようにするのは観光(業)であり、観光資源の性質や特性ではない」としているが、ここでいう「観光(業)」を「働きかけ」と言い換えることができるならば、ここに観光資源の効果的な利用の意義が込められている。

このように、観光資源論の立場から見ると、資源の保全は、森重(2012:120-121)が述べているように、働きかけの対象である資源の特性によって決まるが、資源の効果的な利用は働きかける側の人びとの条件や価値観によって決まる。観光資源論では、資源の特性や分類に着目するだけでなく、資源化プロセスに着目した研究も古くから行われてきた。従って、人びとと資源の関係性から効果的な利用を考えていくことが肝要である。こうした資源の特性を考慮して保全を図りながら、人びとのニーズに合わせた効果的な利用を進めるというバランスを図ることによって、持続可能な観光を推進できる。

### Ⅲ 淡路島の概要と日本遺産

#### 1. 兵庫県淡路島の概要

淡路島は兵庫県南部の瀬戸内海に属し、面積は595.71km<sup>2</sup>で瀬戸内海最大の島である。人口は135,147人である(2015年国勢調査)が、1947年の226,890人から減少の一途を辿っている。1965年以降、淡路島には洲本市と津名郡・三原郡の10町があったが、いわゆる「平成の大合併」によって洲本市、南あわじ市、淡路市の3市になった。

かつて、淡路島には洲本・阪神航路や深日航路、播淡航路、阿淡航路など、本州や四国をつなぐ多くの海上交通があった(投石編 2014:132-133)。また、島内には洲本と福良を結ぶ淡路交通の鉄道も運行されていた。しかし、鉄道は1966年9月に廃止され、1985年の大鳴門橋、1998年の明石海峡大橋の架橋によって、交通の中心は自動車へと移っていった。このように、島内に鉄道がなく、路線バスも少ない脆弱な公共交通が、観光振興上の課題としてあげられて

いる(淡路島総合観光戦略策定会議 2018:19)。

産業面では、淡路島は古くから農業や畜産業が盛んで、関西圏の大消費地に近いことや海上交通が発達していたことなどから、食料の供給基地としての役割を担ってきた(投石編 2014:117)。島内では、コメとタマネギ、キャベツ、ハクサイ、レタスなどを組み合わせた三毛作栽培が盛んに行われ、タマネギは全国第3位の生産量を誇っているほか、カーネーションやキクなどの花卉栽培、生乳や肉牛などの畜産業も盛んで、すでに「淡路島たまねぎ」や「淡路ビーフ」はブランドが確立されている(投石編 2014:117-120)。また、イカナゴは漁獲量全国1位、シラス、スズキ、タコ類は第2位を占めるなど、瀬戸内海側の漁獲量の約半分を占めるほか、ノリやワカメの養殖も行われている(投石編 2014:122-124)。さらに、線香は生産高日本一を誇るほか、手延素麺や真珠核、淡路瓦など、多様な地場産業も残されている(投石編 2014:109-116)。

淡路島の特徴の1つに、「国生み神話」の舞台であることがあげられる。古事記には、イザナギノミコトとイザナミノミコトの二柱の神様が最初に「淡道之穂之狭別嶋」を創造したと記され、これが現在の淡路島とされている。そうしたこともあり、島内には伊弉諾神宮や沼島など、神話に由来する場所や資源が多い。また、第一次産業が盛んであることは述べたが、古代から食材に恵まれた地であったと考えられ、若狭や志摩とともに、大和朝廷に海山の産物を貢進する「御食国」<sup>4)</sup>と呼ばれていた。さらに、1500年代初めに西宮の百太夫が淡路島三條村に人形操りを伝えたのが始まりとされる淡路人形浄瑠璃は(投石編 2014:93)、1976年に国の重要無形民俗文化財に指定されている。このように、淡路島には数多くの固有の歴史や文化が残されており、後述する日本遺産の中核をなすテーマとしても活用されている。

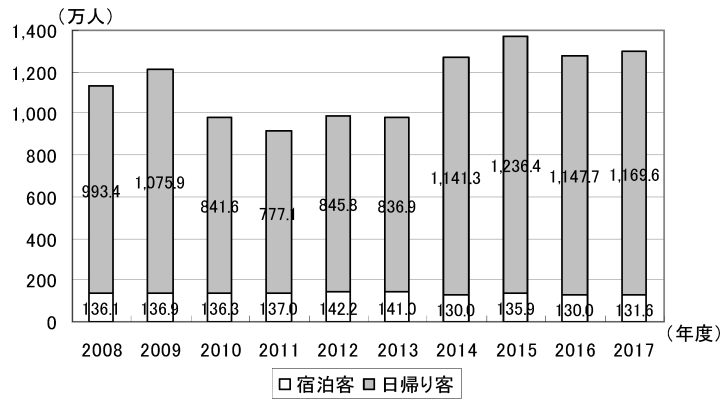
#### 2. 淡路島の観光の概要

次に、淡路島の観光の特徴について、淡路島

では観光も主要産業の1つになっている。戦後の高度経済成長期に、モータリゼーションに合わせてドライブや温泉、海水浴、キャンプ、釣りなど、関西圏からの多くの観光客で賑わった。兵庫県観光客動態調査報告書によると、2017年度の観光入込客数は1,301.2万人で、うち約9割を日帰り客が占めている。過去10年間の観光入込客数の推移を見ると、東日本大震災があった2010～2011年度以降、観光入込客数はおおむね増加傾向にあるが、宿泊客数は横ばいが続いている(図3)。2017年度の島内主要観光地の観光入込客数は表1の通りである。平

成29年度兵庫県観光客動態調査報告書によると、「ニジゲンノモリ」が開設された県立淡路島公園やあわじ花さじきは、テレビ放映の増加やインスタグラムのスポットとしての利用の増加により、前年度に比べて大幅に観光入込客数が増加した。近年は、2012年8月に廃校を再生した「のじまスコラ」や2017年7月に「ニジゲンノモリ」、2018年4月に「HELLO KITTY SMILE」など、パナソニックグループがさまざまな観光施設を整備しており、これらを訪れる観光客も増えている。

一方、2016年の淡路島への都道府県別宿泊



(資料) 兵庫県観光客動態調査報告書

図3 淡路島の観光入込客数の推移

表1 淡路島の主要観光地の観光入込客数 (2017年度)

市町名	主要観光地名	観光入込客数 (千人)	対前年比
淡路市	伊弉諾神宮	1,769	98.4%
淡路市	淡路ハイウェイオアシス	1,673	99.1%
淡路市	あわじ花さじき	876	114.9%
洲本市	洲本温泉	495	110.7%
淡路市	県立淡路島公園	464	141.2%
南あわじ市	淡路ファームパークイングランドの丘	395	95.7%
南あわじ市	道の駅うずしお	390	93.4%
淡路市	淡路ワールドパーク ONOKORO	261	94.9%
南あわじ市	淡路島牧場	192	98.3%
淡路市	野島断層保存館	136	92.8%

(資料) 平成29年度兵庫県観光客動態調査報告書一部改

者数を見ると、大阪府が608,404人(35.1%)、兵庫県が427,136人(24.7%)、京都府が163,735人(9.5%)の順で、これらを含めた近畿2府4県が79.8%を占めている(淡路島総合観光戦略策定会議2018:11)。これはあくまで宿泊客の割合であるが、他地域からの観光客の割合が低いことが課題になっている。

このように、淡路島は前述した「国生み神話」や「御食国」、淡路人形浄瑠璃といった固有の歴史・文化、タマネギや牛乳、淡路ビーフ、イカナゴやシラスなどの淡路島産の豊富な食材、瀬戸内海国立公園や鳴門海峡の渦潮などの自然、洲本温泉や南あわじ温泉郷など、観光資源に恵まれている。また、淡路島総合観光戦略策定会議(2018:13)によると、来訪者の満足度は兵庫県10地域の中で、淡路島の評価が最も高い。このように観光資源が豊富で、来訪者の満足度が高い一方で、全島的な観光戦略やブランド戦略の欠如、観光推進体制の脆弱さなどが課題として指摘されている(淡路島総合観光戦略策定会議2018:19)。

### 3. 日本遺産の概要

日本遺産とは、文化庁が認定する「地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリー」<sup>5)</sup>である。文化庁によると、世界遺産や文化財が登録・指定されるものの価値づけを行い、保護することを目的とするのに対し、日本遺産は地域に点在する遺産を「面」として活用し、発信することで、地域活性化を図ることを目的としている点に違いがあり<sup>6)</sup>、文化財の「利用」が強く意識されている。日本遺産では「ストーリー」が重視され、地域に点在するさまざまな文化財を、地域の歴史的魅力や特色を生かしたストーリーで結び、地域が主体となって活用することによって、それらを国内外に戦略的に発信し、地域の活性化や観光振興に結びつけることをめざしている(淡路島日本遺産委員会2016:1)。

また、日本遺産として認定するストーリーは、①歴史的経緯や地域の風土に根ざし世代を

超えて受け継がれている伝承、風習などを踏まえたストーリーであること、②ストーリーの中心には、地域の魅力として発信する明確なテーマを設定の上、建造物や遺跡・名勝地、祭りなど、地域に根ざして継承・保存がなされている文化財にまつわるものが据えられていること、③単に地域の歴史や文化財の価値を解説するだけのものになっていないことという3点を踏まえた内容とする必要がある<sup>7)</sup>。さらに、そのストーリーには、単一の市町村内で完結する「地域型」と複数の市町村にまたがって展開する「シリアル型(ネットワーク型)」の2種類がある<sup>8)</sup>。そして、ストーリーを語るための有形・無形の文化財を対象に含めることになるが、その際に国指定・選定文化財を1つ以上含めなければならない。

日本遺産は2015年4月に18件が初めて認定されて以降、2020年6月までに104件が認定されている。このうち、地域型の日本遺産は約3分の1の35件で、大半はシリアル型で認定されている。シリアル型の中には県境を越えて展開されるストーリーがあるほか、「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落」のように、北海道から広島県まで15道府県にまたがる広域のストーリーも見られる。なお、日本遺産は2020年度の募集をもって当面最後とすることになっている。

### 4. 淡路島における日本遺産認定の経緯

淡路島では、2016年4月に『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」～古代国家を支えた海人の営み～」が日本遺産に認定された。そのきっかけは、一般社団法人淡路島青年会議所が2014年10月頃に日本遺産の制度創設を知り、同年12月から翌年2月にかけて、淡路市・洲本市・南あわじ市(以下、「島内3市」という)と協議したところから始まる。伊弉諾神宮権禰宜で、淡路島日本遺産のストーリーの作成にかかわった本名佑至氏への聞き取り調査によると、淡路島青年会議所は創立以来「淡路はひとつ」を基本理念に活動しており、当時は「まずは観

光から1つにしたい」という思いがあった。その後、国生み神話と海のかかわりを軸としたストーリーを作成し、島内3市が2015年2月に「日本のはじまりの地 淡路島」として申請した。しかし、歴史的事実の羅列が多く、ストーリー性が不十分であったこともあり（産経新聞2016年4月26日）、1回目の日本遺産には認定されなかった。本名氏によると、古事記に基づく神話だけでは淡路島とのつながりを検証しようがないということで、ストーリーの再整理が求められた。

そこで、2015年6月に島内3市と淡路島青年会議所に加え、兵庫県淡路県民局、一般財団法人淡路島くにうみ協会、一般社団法人淡路島観光協会が参加して「淡路島日本遺産委員会」（委員長：門康彦淡路市長）を設立した。そして、漁業や航海術を備えた淡路島の海の民「海人」に焦点を当てて、ストーリーを練り直していった（産経新聞2016年4月26日）。

また、申請内容には2015年4月に南あわじ市で見つかった「松帆銅鐸」もストーリーに盛り込み、古事記の「国生み神話」の背景にある人びとの営みもアピールした（産経新聞2016年4月26日）。この松帆銅鐸は、弥生時代前期末から中期前半に製作された古い銅鐸7点で、うち1点は最古段階の菱環鈕式銅鐸<sup>9)</sup>であった。松帆銅鐸は、全国で初めて銅鐸の内部に舌<sup>10)</sup>が入った状態で発見されたほか、銅鐸と舌を吊り下げるひもも全国で初めて確認された。また、銅鐸が入り子状態で出土し、そのまま内部を調査できたのは、全国で2例目であった。

そして、1回目の申請で指摘された古事記の中で重要な位置を占める「国生み神話」と淡路島の関係を明確にするとともに、その背景にある海人と呼ばれた海の民の活躍と島の歴史の魅力、それが今の淡路島にどのように受け継がれているかを描いたストーリーとして再度申請した。その結果、2回目は全国67件の申請のうち、淡路島が申請したものも含め、19件のストーリーが2016年4月に認定された。なお、兵庫県では丹波篠山市が申請した「丹波篠山デカ

ンシヨ節－民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶－」に続く2例目で、シリアル型としては兵庫県内で初めての認定となった。

## 5. 淡路島日本遺産の概要

2度目の申請によって認定された淡路島の日本遺産「『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」～古代国家を支えた海人の営み～」は、①古事記に描かれた天地創造の物語「国生み神話」、②金属器時代の幕開けをもたらした「海の民」、③塩づくりと航海術で王権を支えた「海人」、④食で都の暮らしを彩った「御食国」の4つのストーリーで構成されている<sup>11)</sup>。「国生み神話」が描かれた背景に、大陸や朝鮮半島と畿内を結ぶ大動脈である瀬戸内海の東端にある淡路島の「海の民」が、古代国家形成期に重要な役割を果たしたことをあげ、島内で発見された多くの銅鐸や銅剣、鉄器生産を始めた五斗長垣内遺跡など、「海の民」がもたらした先端文化と伝承を関連づけることで<sup>12)</sup>、「国生み神話」と淡路島の関係を明確にしている。また、3世紀以降の製塩技術や航海術によって淡路島の海人が王権を支えたことや、海人が生産する塩や海の幸が朝廷に貢進された「御食国」という史実から、朝廷と淡路島の関係を見出し<sup>13)</sup>、「国生み神話」が誕生する背景に結びつけている。

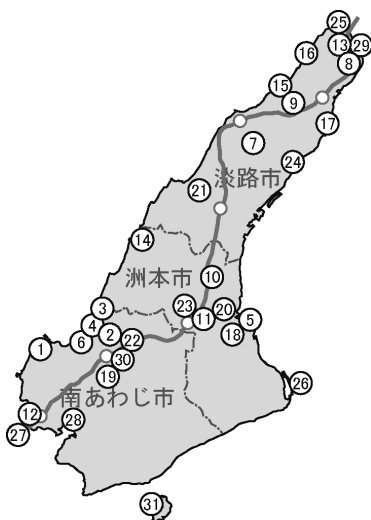
その結果、まとめられた淡路島日本遺産のストーリーの概要は、日本遺産パンフレットに次のようにまとめられている。「わが国最古の歴史書『古事記』の冒頭を飾る「国生み神話」。この壮大な天地創造の神話の中で最初に誕生する“特別な島”が淡路島である。その背景には、新たな時代の幕開けを告げる金属器文化をもたらし、後に塩づくりや巧みな航海術で畿内の王権や都の暮らしを支えた“海人”と呼ばれる海の民の存在があった。畿内の前面に浮かぶ瀬戸内最大の島は、古代国家形成期の中核を支えた“海人”の歴史を今に伝える島である」（文化庁2019：27）。

このストーリーに合わせて、31の構成文化財があり（表2）、島内に広く分布している（図4）。

表2 淡路島日本遺産の構成文化財

No.	文化財の名称	所在地	ストーリー	No.	文化財の名称	所在地	ストーリー
1	中川原銅鐸	南あわじ市	②	17	引野遺跡	淡路市	③
2	日光寺銅鐸	南あわじ市	②	18	旧城内遺跡	洲本市	③④
3	銅鐸出土地中の御堂	南あわじ市	②	19	木戸原遺跡と出土遺物	南あわじ市	③
4	松帆銅鐸	南あわじ市	②	20	コヤダニ古墳出土三角縁神獣鏡	洲本市	③
5	慶野銅鐸	洲本市	②	21	伊弉諾神宮	淡路市	①
6	古津路銅剣	南あわじ市	②	22	大和大罔魂神社	南あわじ市	①
7	五斗長垣内遺跡と出土品	淡路市	②	23	先山千光寺	洲本市	①
8	塩壺西遺跡	淡路市	②	24	御井の清水	淡路市	④
9	舟木遺跡	淡路市	②	25	明石海峡と松帆の浦	淡路市	③
10	二ツ石戎ノ前遺跡と出土品	洲本市	②	26	紀淡海峡と由良・成ヶ島	洲本市	③
11	下内膳遺跡	洲本市	②④	27	鳴門海峡のうずしお	南あわじ市	①
12	沖ノ島古墳群と棒状石製品	南あわじ市	③	28	淡路人形浄瑠璃	南あわじ市	①④
13	石の寝屋古墳群	淡路市	③	29	絵島	淡路市	①
14	岡の谷1号墳	洲本市	③	30	自凝島神社と国生み神話伝承地	南あわじ市	①
15	畑田遺跡の棒状石製品	淡路市	③	31	沼島	南あわじ市	①④
16	貴船神社遺跡	淡路市	③				

注) ストーリー欄の番号は、①古事記に描かれた天地創造の物語「国生み神話」、②金属器時代の幕開けをもたらした「海の民」、③塩づくりと航海術で王権を支えた「海人」、④食で都の暮らしを彩った「御食国」を指す。  
淡路島日本遺産委員会(2017)『淡路島日本遺産の歩き方ー古事記の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」～古代国家を支えた海人の営み～』を参考に作成。



注) 図中の番号は表2の構成文化財の番号に対応している。

図4 淡路島日本遺産の構成文化財の分布

このうち中川原銅鐸と日光寺銅鐸、慶野銅鐸、塩壺西遺跡の4件が国指定重要文化財、五斗長

垣内遺跡と出土品が国指定史跡、淡路人形浄瑠璃が国指定重要無形民俗文化財にそれぞれ指定されている。また、明石海峡と松帆の浦、紀淡海峡と由良・成ヶ島、鳴門海峡とうずしお、絵島、沼島の5件が自然観光資源である。

#### Ⅳ 日本遺産認定後の淡路島の取り組み

2016年4月の日本遺産認定以降、淡路島では日本遺産を活用したさまざまな取り組みが行われてきた。そこで、以下では日本遺産の普及・啓発、日本遺産の価値・魅力の向上、日本遺産の観光戦略としての位置づけという3つの視点から、淡路島での取り組みを整理する。

##### 1. 普及・啓発に向けた取り組み

2015年6月に日本遺産の認定をめぐって設立された淡路島日本遺産委員会は、2016年4月の日本遺産認定以降、文化庁の日本遺産魅力発信推進事業の補助などを受けて、その普及・啓



発に向けた役割へとシフトしていった。同年10月には、淡路島日本遺産委員会が主催して「淡路島日本遺産認定記念フォーラム」が開かれ、日本遺産認定記念式やトークセッションなどが行われた。また、2017年11月には日本遺産にかかる展示や体験、物販などのイベント「日本遺産フェスティバル」が「御食国 和食の祭典」と同時開催された。なお、日本遺産フェスティバルは翌年11月にも開催されている。さらに、淡路島日本遺産委員会が他団体と連携したシンポジウムや講演会、構成文化財を公開する日本遺産展のほか、松帆銅鐸イベントでの銅鐸づくりや五斗長垣内遺跡での体験、淡路人形座での国生み神話を題材にした落語など、日本遺産に関連した数多くのイベントが行われている。

こうしたイベントの他にも、構成文化財の近くに日本遺産を紹介する案内板を設置したり、日本遺産を巡る旅を旅行雑誌などで紹介したり、構成文化財を巡る周遊コースを掲載したマップを制作したりしている。これらの周遊コースには、構成文化財以外の体験や飲食なども含まれており、認知度の高い島内の観光資源と組み合わせて日本遺産を紹介する形になっている。また、淡路島日本遺産のフリーペーパーを制作し、島内3市の全戸配布も行うことで、島民への認知度の向上も図っている。

さらに、若年層に対する日本遺産の啓発・普及に向け、2019年4月にスマートフォンを利用したロールプレイングゲームアプリ「はじまりの島 淡路島日本遺産RPG」を無料(ゲーム内での課金あり)でリリースした。この淡路島日本遺産RPGが注目を集めるなか、ゲーム内で登場するキャラクターの等身大パネルが、島内の日本遺産にちなんだ観光地に設置されている。また、淡路島をはじめ、全国の神話や伝承、歴史書などを題材にした漫画コンテスト「全国くにうみ漫画ワールドカップ」で作品を募集し、2020年3月に第1回の受賞作が表彰された。

このように、淡路島日本遺産の普及・啓発に向けて、さまざまな団体が多様な取り組みを展開している。こうした情報は、淡路島日本遺産

委員会のウェブサイトのほか、FacebookやインスタグラムなどのSNSを通して積極的に発信されている。

## 2. 価値・魅力の向上に向けた取り組み

淡路島日本遺産委員会では、日本遺産の普及・啓発だけでなく、その価値や魅力の向上にも取り組んでいる。

例えば、日本遺産に認定された翌年7～9月にかけて、島民が日本遺産に選ばれたことに誇りを持ち、島外からの観光客に語れるようにすることをめざして<sup>14)</sup>、まちづくりワークショップ「淡路まちづくりカフェ」が開催された。淡路まちづくりカフェは、島内3市でそれぞれ3回ずつ実施され、各市のワークショップで考えられたアイディアは、前述した日本遺産フェスティバルで体験プログラムやブースとして発表された。

また、2018年1月には観光ガイド向けの淡路島日本遺産公認教科書として、『淡路島日本遺産の歩き方』が刊行された。この教科書はA5判152ページで、4つのストーリーやモデルコース、各構成文化財の概要や注目ポイントなどを紹介している。

さらに、2018年11月には淡路島日本遺産のPRに向け、知識を磨くサポーター間でのネットワークの構築と交流を目的に、「淡路島日本遺産サポータークラブ」が設立された<sup>15)</sup>。淡路島日本遺産の取り組みに興味のある者や淡路島日本遺産の事業をPR・支援・協力する者が対象で、現在約50名の会員がいる(本名氏への聞き取り調査による)。サポータークラブでは、年2回の勉強会と年1回の現地視察などが行われ、ボランティアガイドとして、日本遺産の価値向上に努めている。

## 3. 観光戦略としての位置づけ

前述したように、淡路島の観光の課題として、全島的な観光戦略やブランド戦略の欠如、観光推進体制の脆弱さなどがあげられていた(淡路島総合観光戦略策定会議 2018:19)。そこ

で、兵庫県淡路県民局を事務局とする淡路島総合観光戦略策定会議が発足し、2018年度からの5ヶ年計画として、2018年2月に「淡路島総合観光戦略」を策定した。この戦略は「日本のはじまり淡路島～わたしたちの誇るふるさと淡路世界中から訪れたい特別な島～」を基本理念とし、「歴史と文化薫る 国生みの島」、「和食のふるさと 御食国」、「豊かな自然・温泉に恵まれた心とカラダの癒しの島」の3つをビジョン（めざすべき姿）としている。これらは日本遺産の4つのストーリーに関連づけられており、「日本のはじまりの島」における歴史と文化として、「神話の時代からの歴史（伊弉諾神宮・沼島）・海人の文化（銅鐸・鉄器）・400年の歴史を誇る伝統文化（淡路人形浄瑠璃）」（淡路島総合観光戦略策定会議 2018：22）が淡路島観光の強みにあげられている。これらを活かした淡路島日本遺産ツーリズムの推進が掲げられているほか、「古来より天皇に食を献上する御食国としての豊富な食材」も強みとして紹介されている。

また、観光推進体制に関して、兵庫県淡路県民局県民交流室の山根隆二郎室長補佐兼未来島推進課長によると、2010年4月に島内の観光協会が淡路島観光協会に統合されたが、それ以降も実質的には3市がそれぞれ観光施策に取り組んでいる状況であった。そこで、島内3市が一体となってプロモーションする体制づくりをめざし、2019年4月に淡路島観光協会が地域連携DMOの候補法人に登録された。そして、新たに専務理事とCMO（Chief Marketing Officer）に民間人を登用するとともに、兵庫県と島内3市から職員を派遣し、新たに観光戦略室を設置した。こうした観光推進体制の強化とともに、日本遺産にかかる文化庁の補助事業の終了に合わせ、淡路島日本遺産委員会の事務局が淡路島青年会議所から淡路島観光協会に移っている。

## V 考 察

これまで淡路島における日本遺産を活用したさまざまな取り組みを整理してきたが、これら

を観光資源論における資源の効果的な利用の観点から評価を試みたい。前述したように、観光資源論では働きかけの対象となる観光資源だけでなく、働きかける側の人びとも含めた資源化プロセスに着目する必要がある。

まず、働きかける側の人びとについて見ると、淡路島日本遺産の普及・啓発の取り組みを通して、島民がさまざまな場面で日本遺産を認識するようになり、これまでの観光資源を日本遺産として捉える「まなざし」が浸透しつつある。観光資源は資源論における資源化とは異なり、一度資源化されたものに新たな価値や魅力を見つけ出すことで再度観光資源として利用する「再資源化」という特徴が備わっている（敷田 2011：37）。日本遺産の構成文化財である銅鐸や遺跡などは、むろん以前から歴史的価値が評価されていた。しかし、日本遺産としての「まなざし」が注がれることで、これらが淡路島の歴史や伝承と結びつけられ、再資源化されている。1つの観光資源に新たな価値や魅力を見出すことで、効果的な利用に結びつけていると評価できる。

一方、働きかけの対象となる観光資源について見ると、これまで全島的な観光戦略やブランド戦略の欠如が課題として指摘されていたが、日本遺産を総合観光戦略の中に位置づけることで、統一のコンセプトに基づく発信を狙っている。このことは、日本遺産の普及・啓発に向けた取り組みと相まって、島民に淡路島日本遺産の浸透を図ることにつながっている。伊弉諾神宮の本名氏によると、日本遺産の認定から3年経ち、例えば南あわじ市の市民が淡路市にある伊弉諾神宮を紹介するようになるなど、島民が淡路島を一体に捉えて観光客に伝えるようになったと変化を語っている。同時に、古事記や日本遺産の情報を知って伊弉諾神宮に参拝する観光客も増えているとし、淡路島の発信力が強まったことも強調していた。他方で、淡路島観光協会広報課長の出口敦司氏への聞き取り調査によると、総合観光戦略の策定に合わせて観光推進体制も強化されるなど、淡路島の観光の方

向性が大きく変わる中で、そうした急激な変化に戸惑っている観光事業者もいて、島内の観光事業者間に温度差が生じている面もある。

淡路島では、日本遺産を総合観光戦略の中に位置づけ、多様な観光資源を1つのコンセプトの下で発信することで課題の克服を図っていたが、一方で日本遺産が歴史資源としての捉え方にとどまっていた、そこからの広がりや弱い面も見られる。つまり、日本遺産の普及・啓発に向けた取り組みによって、そのストーリーの浸透は図られたものの、あくまで歴史資源の範疇でしか展開されていない。例えば、2019年11月から淡路島日本遺産展「古代淡路島の海人と交流－青銅・鉄・朱・塩－」という企画展が洲本文化史料館などで開催された。日本遺産展では、構成文化財以外の資料も展示されていたが、人文観光資源の域を出ていない。

森重(2020:170)は、自然資源と人文資源といった個別の資源の魅力を伝えるのではなく、それらの組み合わせや相互作用、コンテキストも含めた「リソースミックス」によって、地域の観光の価値や魅力を高めることを提案している。3つのビジョンを設定した淡路島総合観光戦略も、本来このリソースミックスをめざしていると考えられる。もちろん、淡路島でこうした動きがまったくない訳ではない。例えば、2017年に開催された「日本遺産フェスティバ

ル」は「御食国 和食の祭典」と同時開催され、歴史資源と食を結びつけようと試みていた。また、前述した日本遺産の構成文化財を巡る周遊コースでは、その周辺にある体験や飲食を含むことで、日本遺産をきっかけに周辺の観光資源に触れる機会を創出している。同様に、他の観光資源から日本遺産を知るための機会も必要であろう。

淡路島における日本遺産の活用の取り組みを前述した図2の観光資源化プロセスに照らし合わせると、次のように整理できる(図5)。働きかける側の人びとについては、日本遺産を観光戦略に位置づけ、その普及・啓発を積極的に進めた結果、島内の観光資源を日本遺産としても捉える「まなざし」が浸透し、再資源化を通して効果的な利用に結びついていた。他方で、働きかけの対象となる観光資源については、日本遺産という統一のコンセプトによって構成文化財を関連づけ、その価値や魅力を高めていた。しかし、日本遺産が歴史資源の範疇にとどまっており、自然資源や食、体験など、他の観光資源へと関連づけを広げるリソースミックスは、まだ道半ばといえる。吉兼(2000:84)は、観光客が好意のまなざしを向け、強い関心と親しみを感じる対象は一資源ではなく、地域そのものであると指摘しているが、リソースミックスによって日本遺産を歴史資源だけでなく、淡路島

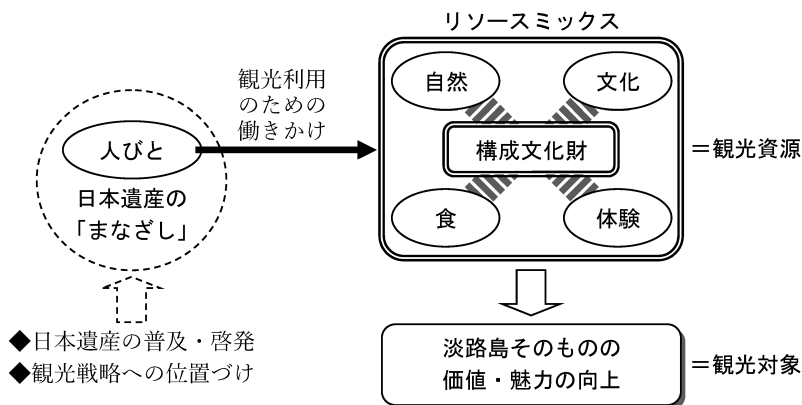


図5 淡路島における日本遺産の観光資源化プロセス

そのものの観光資源として価値づけしていくことが今後の課題といえよう。

## VI 結 言

観光資源 (resources for tourist) という用語は、戦前の日本で国際観光事業の重要性が叫ばれ、その経済的効果が注目された時に、一般産業における「資源」の語に倣って採用されたとされる(高橋 2014: 110)。それ以降、定義や分類、評価など、さまざまな観光資源研究が行われてきたにもかかわらず、現在も統一された解釈や見解が存在しない状況にある。そこで、本研究は観光資源化プロセスに着目することで、観光資源論から見た観光資源の効果的な利用の考え方を考察した。そして、観光資源の効果的な利用を図るには、働きかけの対象となる観光資源だけでなく、観光利用のために働きかける側の「人びと」に着目する必要がある、人びとの条件や価値観によって利用のあり方が決まることを明らかにした。

その上で、兵庫県淡路島の日本遺産を活用した取り組みを事例に取り上げ、日本遺産の効果的な利用に向けた現状と課題を整理した。その結果、日本遺産を淡路島総合観光戦略の中に位置づけ、島民に向けた普及・啓発を図ることで、働きかける側の人びとが既存の観光資源に対して日本遺産の「まなざし」も向ける、再資源化のプロセスを見出すことができた。一方、働きかけの対象となる観光資源も、日本遺産という統一のコンセプトによって観光資源が結びつけられるようになり、発信力の強化につながっていた。しかし、観光資源の結びつけの多くが歴史資源の範疇にとどまっており、日本遺産に興味・関心を持つ観光客にしか訴求できていない課題をあげた。その上で、今後は多様な資源の組み合わせや相互作用といった「リソースミックス」をつくり出す必要があることを指摘した。

2016年4月に日本遺産に認定されて以降、淡路島では観光戦略の策定も含めてさまざまな取り組みが展開されてきた。それらの評価を行う

には時期尚早かもしれないが、少なくとも日本遺産の効果的な利用に向けて、その普及・啓発や価値・魅力の向上を図ることで、島内の日本遺産に対する理解も深まりつつある。しかし、観光客の日本遺産の認知度は決して高いとはいえず、そのストーリーを求めて旅行する者も多くはない。島外に向けて淡路島日本遺産の認知度を高めていくことももちろん重要であるが、むしろ淡路島の観光地を訪れた時に、観光資源の背景にあるストーリーや資源のつながりを感じられるようにする取り組みも必要ではないか。その意味で、観光ガイドに向けた教科書の刊行やサポータークラブの設立といった取り組みは、日本遺産の価値や魅力を高める上で重要といえる。

矢野(2017: 117)は、新潟県村上市の取り組みを事例に、町屋を観光資源化するにあたって、訪れる観光客を目標けて投げかけていくのと同時に、そこに住まう者にも目標けて投げかけていくことで、「外」だけでなく、町屋文化の担い手として「自ら」に対しても向けられ、まちづくりとしての広がりが可能になることを指摘している。観光客と同時に、島民にも日本遺産の価値や魅力を伝えることで、島民と観光客のつながりが生み出される。その時に、背景にあるコンテキストとしての日本遺産のストーリーが観光客に伝わることで、日本遺産が淡路島全体を表現する価値や魅力へと昇華するのではないか。これも観光資源の効果的な利用といえよう。

## 謝 辞

淡路島での現地調査を実施するにあたり、淡路おみな协会会长で四国大学短期大学部特任教授の投石文子氏には、聞き取り調査のコーディネートをはじめ、多大なるご支援、ご協力を賜った。また、兵庫県淡路県民局県民交流室室長補佐兼未来島推進課長の山根隆二郎氏、一般社団法人淡路島観光協会観光戦略室長の松田哲朗氏、同広報課長の出口敦司氏、伊弉諾神宮権禰宜の本名佑至氏には、お忙しい中を聞き取り調査や資料収集にご協力いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

付 記

本研究は、独立行政法人日本学術振興会科学研究費助成事業(科学研究費補助金)(基盤研究B)「観光地域における資源戦略のための地域資源の高度利用プロセスの研究(18H03459)」(2018～2021年度、研究代表者: 敷田麻実)および日本観光研究学会研究分科会「地域主導型観光における推進組織のマネジメントに関する研究」(2017～2019年度、研究代表者: 清水苗穂子)の研究結果の一部である。

注

- 1) 観光資源は観光対象の素材に過ぎないという考え方にに対し、井上(1967: 127)は「観光資源という語は、多くの人びとによってしばしば用いられている。明確な定義があるわけではなく、人によってその意味する範囲に多少のずれがある。最広義においては観光対象と同じものをさすとする考え方がある」と述べている。そして、「一般の用例の振合いからいうと、個々の観光対象を観光資源と呼ぶことは適当でないように思われる」(井上 1967: 128)としながらも、観光資源は「比喩的な用法にせよ、理解しやすい便利な用語であり、しかもその地位がすでに確立しているのであるから、この語を活用して、その保護、育成、開発について一般の留意をうながすことが適切であろう」と指摘し、観光対象を観光資源として表現することを容認している。このように、観光対象としての意味を持つ場合も含めて、「観光資源」と称している研究も少なくない。
- 2) Payne(2003: 506)はこの考え方にに対し、「道具的な価値だけが、人びとが自然に愛着を抱く唯一の重要な価値ではない」との批判があることも合わせて主張している。
- 3) 三徳山三佛寺「投入堂 縁起」<https://www.mitokusan.jp/nageire.html> (2020.04.12 閲覧)
- 4) 投石編(2014)では「御食つ国」と表記されているが、本研究では淡路島日本遺産で用いられている「御食国」に統一した。
- 5) 文化庁「日本遺産(Japan Heritage)」について [https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon\\_isan/](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/) (2020.04.17 閲覧)
- 6) 同上
- 7) 同上
- 8) 同上
- 9) 菱環鈕式銅鐸とは、銅鐸を吊り下げる「鈕」の断面が長い菱形になっている最古段階の銅鐸で、松帆銅鐸も含めて全国で12点しか確認されていない。
- 10) 舌とは、銅鐸の中に吊り下げて音を鳴らすための棒のこと。
- 11) 淡路島日本遺産委員会「淡路島のストーリー」<http://kuniyumi-awaji.jp/story/> (2020.04.18 閲覧)

- 12) 日本遺産ポータルサイト「『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」」<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story030/> (2020.04.19 閲覧)
- 13) 同上
- 14) 淡路島日本遺産委員会「日本遺産「国生みの島・淡路」」<https://www.facebook.com/日本遺産国生みの島淡路-596497370537637/> (2020.04.19 閲覧)
- 15) 淡路島日本遺産委員会「淡路島 日本遺産の島内報が完成!!」<http://kuniyumi-awaji.jp/news/1524/> (2020.04.19 閲覧)

参考文献

- 足羽洋保(2007)『観光資源論』中央経済社、176p.  
 淡路島総合観光戦略策定会議(2018)『淡路島総合観光戦略-日本のはじまり淡路島』、44p.  
 淡路島日本遺産委員会(2016)『『古事記』の冒頭を飾る「国生みの島・淡路」～古代国家を支えた海人の営み』、6p.  
 井上萬壽蔵(1936a)「観光資源論序説」『国際観光』第4巻第2号、pp.9-11.  
 井上萬壽蔵(1936b)「観光資源論序説(承前)」『国際観光』第4巻第3号、pp.7-9.  
 井上萬壽蔵(1967)『観光と観光事業』国際観光年記念行事協力会、283p.  
 上田卓爾(2017)「新たに公開された『観光資源台帳』について-観光資源論の視点から」『大阪観光大学観光学研究所年報 観光研究論集』第16号、pp.15-26.  
 尾家建生(2009)「観光資源と観光アトラクション」『大阪観光大学紀要』第9号、pp.11-19.  
 大橋昭一(2010)『観光の思想と理論』文眞堂、256p.  
 岡本伸之・越塚宗孝(1978)「観光対象と観光資源」前田勇編著『観光概論』学文社、pp.42-49.  
 河村誠治(2005)「観光資源開発の方向性」『長崎国際大学論叢』第5巻、pp.129-138.  
 佐藤仁(2008)「今、なぜ「資源分配」か」佐藤仁編『資源を見る眼-現場からの分配論』東信堂、pp.3-31.  
 敷田麻実(2011)「エコツーリズムにおける資源利用とその課題」敷田麻実・森重昌之編著『地域資源を守っていかすエコツーリズム』講談社、pp.26-45.  
 高橋光幸(2014)「観光資源の定義と分類に関する考察」『富山国際大学現代社会学部紀要』第6巻、pp.109-125.  
 寺前秀一(2017)「観光資源論の再構築と観光学研究の将来」『横浜市立大学論叢』第68巻第2号、pp.165-214.  
 中川和子(2019)「資料に残る御堂筋線 梅田-西田辺間のむかし」『鉄道ビクトリアル』第69巻第8号(2019年8月臨時増刊)、pp.111-115.  
 投石文子編著(2014)『改訂 淡路学読本』淡路学読本編

- 纂会議・にこちゃん塾, 148p.  
文化庁(2019)『「日本遺産(Japan Heritage)」パンフレット』, 54p.  
Payne, R. J. (2003) Resources, Jafari, J. ed., *Encyclopedia of Tourism*, Routledge World Reference, pp.506-507.  
溝尾良隆(2008)「観光資源論－観光対象と資源分類に関する研究」『城西国際大学紀要』第16巻第6号, pp.1-13.  
森重昌之(2012)「観光資源の分類の意義と資源化プロセスのマネジメントの重要性」阪南大学学会『阪南論集 人文・自然科学編』第47巻第2号, pp.113-124.  
森重昌之(2020)「観光・交流と生物文化多様性」敷田麻実・湯本貴和・森重昌之編著『はじめて学ぶ生物文化多様性』講談社, pp.153-172.  
矢野敬一(2017)『まちづくりからの小さな公共性－城下町村上の挑戦』ナカニシヤ出版, 241p.  
吉兼秀夫(2000)「エコミュージアムと地域社会」石原照敏・吉兼秀夫・安福恵美子編著『新しい観光と地域社会』古今書院, pp.84-94.

(2020年7月3日掲載決定)